

彼らは後ずさりし、地に倒れた

ヨハネ福音書18章1-11節 【新改訳 2017】

- 18:1** これらのことを話してから、イエスは弟子たちとともに、キデロン谷の向こうに出て行かれた。そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。
- 18:2** 一方、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスが弟子たちと、たびたびそこに集まっておられたからである。
- 18:3** それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たちを連れ、明かりとたいまつと武器を持って、そこにやって来た。
- 18:4** イエスのご自分に起ころうとしていることをすべて知っておられたので、進み出て、「だれを捜しているのか」と彼らに言われた。
- 18:5** 彼らは「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「わたしがそれだ」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒に立っていた。
- 18:6** イエスが彼らに「わたしがそれだ」と言われたとき、彼らは後ずさりし、地に倒れた。
- 18:7** イエスがもう一度、「だれを捜しているのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。
- 18:8** イエスは答えられた。「わたしがそれだ、と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。」
- 18:9** これは、「あなたが下さった者たちのうち、わたしは一人も失わなかった」と、イエスが言われたことばが成就するためであった。
- 18:10** シモン・ペテロは剣を持っていたので、それを抜いて、大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。
- 18:11** イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 共観福音書ではゲッセマネの園で苦悩の祈りを記しているのに、ヨハネ福音書はなぜそれを記していないのですか。
- (2) 主が「わたしがそれだ」と言われた時、彼らは後ずさりし、地に倒れた。どうして倒れたのですか。
- (3) ヘブル12:2で「ご自分の前に置かれた喜び」とは何を意味しますか。

【解 説】

(1) ゲッセマネの園へ

主イエスは弟子たちと共に「ゲッセマネの園」に来られた。ここで最後の祈りをするためである。夜が明けると十字架に付けられることになる。主はそのことをよくご存知だった。それは壮絶な祈りの葛藤だった。

マタイ26章39節を見ると、捕縛の前の場面で祈られた主の祈りが記されている。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください」。主はこの同じ祈りを三度繰り返されたという（マタイ26:44）。

主が飲み干さなければならぬ杯は過ぎ去ってほしいものであった。それは取りのけてほしいものであった。マタイだけではなく、マルコもルカも、この苦悩の祈りを記している。ルカは「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」（ルカ22:44）とも証言している。

しかし、ヨハネにおいては、この苦悩の祈りは記さず、別の視点でこのゲッセマネの園での出来事を記している。それは、イエスが神であるという視点である。その権威あるお姿を、このゲッセマネの園でも見ることができる。

(2) ユダが一隊の兵士や下役たちを連れてやって来た

主が、このオリーブ山の中腹にあったゲッセマネの園へよく出て、弟子たちと一緒に過ごされ、祈られたことは、弟子のひとりであったイスカリオテのユダもよく知っていた。だから、最後の晩餐の途中で抜け出したユダは、そこへ行けば、主イエスを敵の手に渡すことができると思い、裏切りの銀貨三十枚（現在なら約100万円）を払ってくれた祭司長たちから送られた下役たちやローマの軍隊を連れてやって来た。

ユダの先導によって彼らがゲッセマネの園に来た時、主はその裏をかくて、そこへ来ないこともできたはずである。先の先を見通しておられた主が、わざわざそこへ行かれたということは、主がわざわざ彼らの手に捕らえられるため

に行っただけということが分かる。

ユダに先導されて来た一隊は、明かりとたいまつと武器を持っており、ユダヤ教の当局者たち（神殿警備隊）だけでなく、ローマの駐留軍までも含む大勢の人々であった。なぜか。イエス様を恐れている。それは、主がいざという時、超自然的な力をもって奇蹟を行われることを知っていたからである。

「明かり」とは、当時のランプであり、今でいう懐中電灯である。そして、たいまつ、これによって、その場が最大限、明るくなるようにして、逃げることをできないように、逃げる道を全てふさぐことができるよう身構えていた。そして武器を持っている。死人のラザロさえも生き返らせたお方ですから、力には力で対抗しようと完全武装し、武器まで手にしてやって来た。

(3) 彼らは後ずさりし、地に倒れた

こうした一隊に対して、主は決して逃げも隠れもなさらなかった。主は逃げ隠れをするどころか、自ら進んで出て来られ、「だれを捜しているのか」という主のことばに対して、彼らが「ナザレ人イエスを」と答えると、イエスは彼らに、「わたしがそれだ」と言われた。

この「わたしがそれだ」という言葉は、イエス様の神宣言である。ギリシャ語では（Ἐγώ εἰμι／エゴ・エイミ）という言葉である。この言葉は、かつてモーセが神様に名前を尋ねた時、「わたしは「わたしはある」という者である」（I AM THAT I AM）（出エジプト3:14）と言われた、あの名前である。ヘブル語では「ヤーウェ」と言うが、それは「あらゆる存在の根源」を意味している。だからここでイエスが「わたしがそれだ」と言われたのは、あの出エジプト記の中で神が「わたしは「わたしはある」という者である」と言われた、あの神ご自身であるということだったのである。

それがどういふことなのかを、ヨハネはこの書の中で具体的にこれを7回用いて説明してきた。それが、「わたしがいのちのパンです」（6:35）とか、「わたしは世の光です」（9:5）、……「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」（14:6）、「わたしはまことのぶどうの木です」（15:1）等である。

主がここで「わたしがそれだ」と言われたのは、ご自分こそ「わたしはある」というお方であり、「すべての存在の根源であられる方、神ご自身である」ということであつた。だから、イエスは、「わたしと父とは一つです。」（10:31）と言われ、また、「わたしを見た人は、父を見たのです。」（14:9）と言われた。イエス様を見れば、まことの神がどのような方であるかがわかる。彼らは「ナザレ人イエス」を捜していたが、そのナザレ人イエスは、まさに神ご自身であられた。

そのことばを聞いた時、彼らはどうなったか？ 6節を見ると、「彼らは後ずさりし、地に倒れた」とある。その圧倒的な権威あることばに、ドミノ倒しのように後ずさりして、そこに倒れてしまった。何百人という完全武装したローマの兵士とユダヤの神殿警備隊が、何の武器も持っていなかった一人の人の声によってバタバタと倒れた。それほど権威があつたということである。

(4) 弟子たちを守られる

この時、主はご自分が捕縛されるという危急に際しても、なお弟子たちを思いやる余裕を持っておられた。武装した一団がどのくらいの間地面に倒れていたかは、書かれていない。しかし、6節の終わりには少しの間合いがあつたと思われる。主のことばの偉力は、弟子たちを捕虜にすることから救い、ユダの一団を非常に恐れさせたので、彼らは主だけを逮捕することで満足した。

この時、弟子たちの信仰はまだ弱いものであつた。もしも彼らがこの時、主と共に捕らえられたら、一も二もなく信仰を捨ててしまったに違いない。主は、弟子たちが耐えられないほどの試みに遭わないように守られた。耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださった。

それは私たちが同じで、私たちが振られたり、打ちのめされたりすることがあるが、全く滅ぼされることはない。ノックダウンすることはあっても、ノックアウトすることはない。それは、私たちの主イエスが私たち一人一人をやさしく見守り、優れた医者のように確かな技術をもって、私たちが耐えられる試練の分量というものを正しく量られるからである。このように、主はそのすぐ前の祈り（17章12節）で言われたことを、その通り実行された。主は、いつも弟子たちの弱さに心を配っておられる。

(5) 父がわたしに下さった杯

そして主は、ご自分から進んで十字架への道を歩んでいかれた。苦難と死の杯は御父が主に下さったものであつて、主はそれを飲むつもりでおられた。

シモン・ペテロは、持っていた剣を抜いて、大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落としてしまった。せっかくイエス様が彼らを守られたのに、ここでペテロは、またまた早まったことをしてしまった。主からの指示もないままに、ペテロは「剣を…抜き、大祭司のしもべ」に切りかかった。そしてルカによると、「やめなさい。そこまでにしなさい。」と言われると、イエス様はその耳にさわって彼を癒された、とある（ルカ22:51）。イエス様の最後の奇跡は、ペテロの失敗をカバーするものであつた。そして、敵の耳を癒された。

なぜか？ そうでないと、ペテロが捕らえられて殺されてしまうからである。イエス様はペテロを最後まで守られた。殺そうと思っていたことは間違いないが、見えざる手によって剣はそれ「右の耳を切り落とした」だけだった。

ヘブル12章2節には「この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座された。」とある。「ご自分の前に置かれた喜び」とは何のことか。私たちの救いである。それが主の喜びであつた。私たちが救うために、主は天から降りて来られ、十字架に掛けられたのである。